

電子オルガンによるオペラ伴奏に関する一考察

— 椿姫を題材とした編曲と演奏の実践 —

A study on opera accompaniment by electronic organ

Transcription and its performance of Verdi's: *La traviata*

音楽文化研究科 音楽表現専攻 07-1036 高橋 絵里香

本論文は、総合芸術といわれるオペラに注目し、そのオーケストラ部分を電子オルガン1台で再現するための編曲法およびレジストレーションを考察するものである。

第1章では、電子オルガンの機能・特徴を調べ、音色数や音色への効果などの基本的な情報の他、リードボイス、ボイスエディット、キーボードパーカッションなど、編曲時に利用できる機能が多種多様にあることを示した。

第2章では、実際にオペラ《椿姫 *La traviata*》を編曲し、オーケストラ譜から電子オルガン譜へ書き換える、つまり3段の譜表に割り当てる際に、それが容易であるものとそうでないものについてそれぞれ考察した。3段に割り当てるのが容易であるということは、オーケストラの機能（主旋律・伴奏・低音・対旋律等）を3つに分類できることを表しており、その場合は3段の鍵盤にそれぞれの機能を割り当てることでオーケストラのイメージにより近い編曲が可能であった。逆に容易でないものとは、オーケストラの機能が4つ以上に分類できたということを表しており、その場合の対処法を実例と共に論じた。その結果、次の3つの対処法があることが分かった。(1) 2つの機能について、それらが片手で弾くことができる音域かつ重ならない音域の場合、リードボイスやボイスエディット等の機能を使用することで1段の鍵盤にまとめる。(2) 打鍵のタイミングが同じであるものに関しては、キーボードパーカッションまたはボイスエディットの機能を利用することで、1段の鍵盤にまとめる。(3) 2つの機能について、音域的に押さえられない、または音域が重なる、打鍵のタイミングが全くバラバラである場合、オーケストラの機能のうち何かをカットする。

この3つの対処法はオペラの伴奏に限らず、他の管弦楽曲を電子オルガン独奏用に編曲する際にも応用できるものとする。